

木村彰男監修，正門由久，太田哲生 編集

脳卒中上下肢痙縮 Expert ボツリヌス治療—私はこう治療している

水落和也（横浜市立大学附属病院リハビリテーション科）

臨床実習でボツリヌス治療見学の学生に私は2つの質問をする。① ボツリヌス食中毒の原因食物を挙げよ。いずし，きりこみ，辛子れんこん，このあたりは勉強をしていなくても社会の出来事に関心がある者は答える。はちみつ，缶詰・ビン詰めなどの保存食品，これは公衆衛生の講義をしっかり聴いていた学生が答える。もう1つ大事なものを忘れていませんか？ ……ハム・ソーセージです。ボツリヌス菌の語源になったラテン語の *Botulus* は腸詰め，つまりソーセージのことなのです。これはほとんどの学生が知らないのです，指導医の面目を保つわけである。質問② ボツリヌス中毒の症状はなにか。複視，四肢の脱力，発声困難，呼吸困難などが出れば優，神経終板におけるアセチルコリンの放出を阻害し呼吸筋麻痺を引き起こし致死率が高いと答えれば秀である。①の質問は患者さんも交えてその場を和ませるのに役立つが，②はこれからまさにボツリヌス治療を受ける患者さんの不安をあおることもあるので，処置が終わってから学生だけに質問するのが賢明である。このような毒物を病気の治療に応用しようとした発想と勇氣に，そしてその毒物を精製し，医薬品として安全に用いる技術を生み出した人間の探求心と畏敬の念を抱いてもらえば，医学教育の最適な教材になる。

わが国では1996年に眼瞼痙攣に対する治療として承認されたA型ボツリヌス毒素の適応が2009年に小児脳性麻痺患者における下肢痙縮に伴う尖足に，2010年に上肢・下肢痙縮に対して拡大されたことによりボツリヌス治療は脳卒中や脊髄疾患，神経変性疾患など多彩な神経疾患における痙縮治療に広く用いられるようになってきた。

ボツリヌス治療は眼科，麻酔科，整形外科，神経内科，リハビリテーション科などさまざまな診療科

で行われる処置だが，四肢の痙縮を身体活動・生活機能の阻害因子と捉えるリハビリテーション科診療では，痙縮治療の重要な選択肢と認識されている。

本書は脳卒中に伴う上肢・下肢の痙縮治療としてボツリヌス治療を行う際に，経験豊富な医師たちがどのように実施しているかの解説書である。患者選択，痙縮評価，施注方法，効果判定，施注後患者管理など，本治療を行う際に検討すべき問題に明確な答えを提供してくれる良書である。

全国のリハビリテーション医療最前線で活躍中のエキスパート28名が執筆し，実に36例の詳細な症例報告が収められている。症例を通してきわめて具体的な解説書であるため，本治療法の経験の少ない医師には常に手元に置いておきたい内容になっている。また，ボツリヌス治療の適応，施注後の患者管理やリハビリテーション治療の注意点などの解説は，看護師，PT，OT，義肢装具士などのリハビリテーション関連専門職に有益な知識を提供する。

本治療を毎週行っている私にとっては，製剤の希釈法，各筋あたりの注射量，施注方法などが各執筆者で異なっていることを興味深く感じた。というのも診療ガイドラインに沿った治療により，安心安全，かつ質の高い医療を何処でも誰でも享受できるということは有益には違いないが，一方で新しい治療法の発想・工夫が生まれにくく，治療の画一化という負の側面も否定できないと，日々感じているからである。痙縮が個々の生活機能に及ぼす影響は多様であるため，ボツリヌス治療もまた多様なアプローチがあることを本書は教えてくれている。

ガイドラインの対極にある，これからの医学書の1つのモデルとしても重要な一冊である。

（B5版 頁184 定価4,500円＋税 [ISBN 978-4-787820-36-5] 診断と治療社刊）